ラテンアメリカ・カリブ研究所レポート　ILAC2023-07
2023 年 9 月

歴史から見るラテンアメリカのかたち―その 4
―多様性に富んだ世界になる物語―

渡邉利夫 *

【要旨】このレポートでは、ラテンアメリカの世界がイスパノアメリカの他に、カリブ海とブラジルからなる多様性に富んだ社会であることを説明する。ブラジルの文化は、イベリア半島のポルトガルをルーツとしているが、自然環境、人種、歴史の違いからイスパノアメリカとは別の社会になった。スペイン語圏との類似性と違いについて筆者の体験から語る。またカリブ海については、多分に欧州政治の影響を受け、イギリス、フランスなどの植民地になり、当時貴重であった砂糖の生産地になったことで、労働力として多数のアフリカ系黒人が連れて来られ、この地域特有のクレオール文化が生まれたことを説明する。

キーワード；**ブラジルの植民地史**と**その文化、旧世界の植民地カリブ海、砂糖と黒人奴隷、クレオール文化**。

はじめに

コロンブスの「新大陸」到達以降、ラテンアメリカ・カリブの世界は大きく発展し、非常に多様性に富んだ社会が生まれた。この論稿では、この地域に特有の多様性について話をするが、その前に、コロンブスの到達によって当時旧世界の人々が受けた衝撃について、歴史家がどう書いているかを見てみたい。

イギリスの歴史学者 J. H. エリオットは、コロンブスの「新大陸」到達と未知の民族との遭遇によって、「地理学や神学や歴史学や人間の本性について…考え方に変更を余儀なくされ」た、16 世紀および 17 世紀初期のヨーロッパ人が受けた衝撃・驚愕や新世界をどう理解したらよいのかわからないという戸惑い、また「新大陸」がもたらした金、銀などの貴金属の流入が「価格革命」を起こし、ヨーロッパの資本主義勃興

---

* ラテンアメリカ・カリブ研究所上級研究員。1970 年外務省入省、スペインを皮切りにブラジルを含む中南米各国で勤務後、2010 年から 12 年まで在ボリビア日本国大使。1986 年ジョンズ・ホプキンス高等国際問題大学院(SAIS)留学。退官後南山大学などで非常勤講師。本稿で示された見解は著者個人のものであり、ラテンアメリカ協会の見解を反映するものではない。正確を期したが、誤りがあれば筆者の責に帰す。本稿は不定期での連載である。

の起爆剤の一つになったばかりか[1]、「ヨーロッパ人が必要とする生産物や物資の供給源とな」り、「新大陸」がヨーロッパの生産物の重要な市場になるなど、その経済的社会的影響について述べている。あわせ、旧世界がアメリカ大陸で新たに土地と資源を獲得したことにより、ヨーロッパ諸国間の勢力関係にいろいろな変化をもたらしたことを指摘している（エリオット p.10）。このように世界帝国が勃興するこの「大航海時代」に、「国力の源泉は、もはやヨーロッパ大陸のなかだけにあるのではなく、ヨーロッパ諸国の抗争の舞台も、これまでのヨーロッパの境界」「を越えて遥かに遠く離れた地域や海域」に広がった(エリオット p.127)。

エリオットによれば、17 世紀半ばまでには「新大陸」はヨーロッパの政治、外交、経済組織、思想体系のなかに漸次組みこまれる(エリオット p.163)が、このことを「新大陸」からの視点で言えば、この論稿で扱うブラジル、カリブ海の歴史もヨーロッパ諸国の植民地支配の中で形成されるということである。列強はカリブ海で、黒人奴隷を使うプランテーション型の砂糖農業を行い、熾烈な経済的、軍事的競争を展開した。その結果カリブ海の方でもヨーロッパの国際関係の影響を受け、現在あるような形で国の構成図が決まり、アフロカリブのクレオール文化が誕生した

この論稿では、「大航海時代」が始まった当初に、どうしてブラジルがポルトガル領植民地になったのか、植民地時代のブラジルの発展、ブラジルがスペイン語圏アメリカとどこが似ており、どこが違っているのかを語る。カリブ海地域の歴史はヨーロッパ列強の植民地化の影響を強く受け、多数の島国になった。そこで列強の旧大陸での戦争・勢力争いを考慮に入れながら、多国史の視点でカリブ海地域の過去を眺める。また「西インド諸島」のことを理解するには、特に環大西洋世界を舞台とするトランスナショナルな関係を探る「アトランティック・ヒストリー」[2]という視点が重要であるので、その点も考慮した。またカリブ海で旧世界とアフリカの遭遇によって生まれたこの地域特有のクレオール文化についても述べる。同質的なイスパノアメリカの植民地史については「その 2」で述べたので、ブラジルおよびカリブ海世界を取り上げることにより、ラテンアメリカ・カリブが多様性に富む世界であることを語りたい。

1. スペインが覇権を確立した「大航海時代」

1492 年にコロンブスが「新大陸」に到達して始まる「大航海時代」は、スペインが世界的レベルで覇権を確立した時代である。その後世界の歴史はヨーロッパを中心に回り始めた。16 世紀のヨーロッパ人は、世界の覇権と文明の中心が次第に東から西へと移動していくものだという古典古代の考え方を引き継いでいた。そこでカスティリャ人たちは、「アメリカの未開人たちを開花させるための布教活動と帝国の建設を神から託された使命と考え新大陸」に渡っていった(エリオット p.150)。「新大陸」の歴史を語るには、ブラジルを除くこの地域がスペインの植民地、すなわち領土であったことから、ヨーロッパ政治に占めていたスペインの位置を知らずしては語れない。

そこでスペイン帝国のことを少し語る。スペインの統一と「レコンキスタ」という夢を実現した「カトリック両王」が没すると、娘で狂女フアナの短い治政を経て、ハプスブルク家のマキシミリアン一世の長子フィリップとの間に生まれたカルロス一世(治 1516-1556)がカスティリャとアラゴンを引き継いだ。1519 年マキシミリアン一世が崩御したことから、カルロス一世は神聖ローマ皇帝(カール五世)にもなり、旧世界と「新大陸」で広大な帝国と築き、スペインの重みが大いに高まった。ところがその代償としてスペインの政治外交はヨーロッパでハプスブルク家が進める帝国主義政策の影響を受けるようになる。それはキリスト教の守護者になることで、1529 年神聖ローマ帝国の首府ウィーンを包囲されるなど東欧並びに地中海でイスラム勢力の脅威から旧世界を防衛すること、帝国内でプロテスタント勢力の鎮圧、皇帝の座を選挙で争うなど宿敵のフランスヴァロア朝(1328-1589)のフランソワ一世(治 1515-1547)とイタリアの領土を巡る争いであった。それができたのも、カスティリャの犠牲があったからである。神聖ローマ帝国以外のすべての領土を継承したフェリペ二世(治 1556-1598)の時代になると、「新大陸」の銀が大量に入ってくるようになり、1559 年の「カトー・カンブレジ和約」でフランスにイタリアに対する要求を放棄させ、1571 年「レパントの海戦」でオスマン・トルコ帝国に勝利し、イスラム勢力の地中海での進出を一旦くじくことに成功した。また 1580 年フェリペ二世はポルトガルの王位を継承し、両国と「同君連合」になった。こうしてカルロス一世はまだヨーロッパの帝国の支配者であるとの認識であったが(エリオット p.137)、フェリペ二世の時代になってスペインは真に「太陽の沈まぬ帝国」となった。

他方、フェリペ二世は、帝国政策の結果財源不足もあって、借財の返済に度々苦しんだ。またカトリック教による国家の統合を重視したことから、1477 年からハプスブルク家の支配下に置いたブルゴーニュ侯国、低地地方(ネーデルラント)ではプロテスタントに対する厳しい弾圧を行い、1568 年オランイェ公ウィレム一世がフェリペ二世に反旗を翻したので、「八十年戦争(1568-1648)」に手を焼くことになる。イギリスのエリザベス一世(治 1558-1603)が私掠船を支援し、盛んに海賊行為することにも悩まされた。女王が重要な毛織物の市場であるネーデルラントを助けたことから、イギリスに「無敵艦隊」を送ったが、1588 年惨敗し、威信を失墜させた。こうしてスペインは徐々に国力を弱めていく。その後は新興国オランダ、イギリス、フランスが台頭し、17 世紀初めに「新大陸」の北米、「西インド諸島」、ブラジルへの進出を許すことになる。スペインは「新大陸」との通商にも支障を受け、次第に覇権を失っていく。スペインの絶頂期は 1560 年から 1640 年にかけての 80 年間であった(エリオット p.142)。

2. ポルトガル領ブラジル

最初に海外に乗り出したポルトガル

さてここでポルトガルとスペインが海外進出を競い合っていた「大航海時代」の始めに話を戻そう。どうしてブラジルがポル

トガルの植民地になったかを知るためには両国が海外進出の覇を競いあっていた時代のことを説明する必要がある。

15世紀に「大航海時代」が始まった時、最初に海外に乗り出していったのはポルトガルであった。この国は、当時富の源泉と考えられていた金のルートを手にし、新興貴族の台頭という国内危機を乗り切るために、1415年ジョアン一世(治1385-1433)が北アフリカのセウタのイスラム教徒の要塞を攻めた。アヴィス朝(1385-1580)が海外に勇躍する嚆矢となった事件である。しかしイスラムの勢力が強大で、北アフリカ地域を支配下に置くことは犠牲が大きいので、その後ポルトガルはその勢力が余り及んでいない西アフリカ沿岸の発見と探検に乗り出す。1443 年にボジャドール岬、1455 年にはギニア、1481 年にはコンゴ河口に到達し、黄金や奴隷を獲得するソースを押さえることができた。1488 年にはバルトロメウ・ディアスが喜望峰を発見し、1497-99年にヴァスコ・ダ・ガマが東方航路でインドのカリカットまで航海する。ポルトガルは 1510 年にはゴアを占領し、ここを首府として、金、銀、東南アジアの香辛料、アジアの珍しい物品を手に入れる貿易の拠点とし繁栄する。それは「点と線」の支配であった。

ポルトガルがスペインに先立って海外進出できた理由としては、①スペインより早い1249年に「レコンキスタ(国土再征服運動)」を終え、国内で強い王権を確立できたこと、②王家が国家事業として海外進出に熱心であったこと、③大西洋に突出しているという恰好の地理的位置、④地理と通商にたけたヴェネチア商人などの協力があったこと、⑤三角帆のカラヴェラ船の考案など 15 世紀後半の航海術の進歩などがあった(渡邉 p.41)。

植民地ブラジルの誕生

コロンブスが「新大陸」に到達すると、海外事業に乗り出していたスペインとポルトガルとの間で領有する境界の問題が発生した。そこで両国はローマ教皇アレクサンデル六世(位 1492-1503)の裁定を求めたが、それにジョアン二世(治 1481-1495)が異議を唱え、両国の直接交渉の結果、1494 年ヴェルデ岬諸島の西 370 レグア(1 レグ=約5.6km)を境界とする「トルデシーリャス条約」が合意された。インド航路発見によって、マヌエル一世(治 1495-1521)はペドロ・アルヴァレス・カブラルの指揮で1500 年 2 月第二次インド船団を派遣するが、その船団がヴェルデ岬諸島を通過した後西に大西洋を大きくそれ、同年 4 月今のブラジル東北部バイア州の沿岸沖に到着する。ブラジル[3]の発見である。「トルデシーリャス条約」を根拠にブラジルはポルトガルに帰属することになった。

こうしてブラジルのアマゾン河口にあるベレン付近から南部サンタカタリーナ州ラグーナ付近を通る子午線の東側がポルトガル領となった。実際の境界線は依然として曖昧のままであった。ブラジルでは探していた金、銀がなかなか見つからなかった。金が見つかるのは 17 世紀末になってからである。またポルトガル王室がアジアと香料などの貿易の方に関心を持っていたために、はじめブラジルの開発は遅々としたものであった。それでも他国の侵入などがあって、ジョアン三世(治 1521-1557)はマル

ティン・アフォンソ・デ・ソウザを派遣し、植民地の防衛と開発に当たらせた。高位の官僚にはポルトガル人を就けた。カピタニア制[4]が採用され、恩恵を受けたドナタリオは世襲制で、土地は開拓を希望するカトリック信者の能力に応じて分割、分与された(セズマリア制)。この世襲のカビタニア制は1759年、セズマリア制は1822年まで続き、巨大な大土地と地方で勢力を持つ家族が出現することになった(田尻 p.17)。これに対し 1510 年頃スペイン領で始まった「エンコミエンダ」の場合は、早くから王権が「受託者」による先住民の乱用や征服者の子孫たちが封建領主化することの懸念から制限するようになり、17世紀王室が有力貴族や廷臣に対する恩賞として利用したために一時盛んになるものの、18世紀に入ると土地が王室に移管され着実に減少していった(近藤 p.37)。ブラジルでは、1548年総督制が導入され、初代総督のトメ・デ・ソウザ(任 1549-1553)は東北部のバイア(サルヴァドル)を首府とした。この時マノエル・ダ・ノブレガ神父等 6 名のイエズス会士がブラジルに来て、ブラジルがカトリック教国になる。

ブラジル東北部の砂糖生産とそれを支えた奴隷

当時ヨーロッパで貴重品扱いをされていた砂糖が、ポルトガル領マデイラ諸島からブラジルに移植され、1526 年までにはリスボンに輸出されるようになった(ミンツ p.85)。砂糖生産の基礎は1530年代から40年代に確立した。ポルトガル人は、先住民が労働に不向きだったことから、アフリカ系黒人奴隷を使って砂糖を大規模に生産するプランテーション方式を採用した。この広大な大地を開拓するには冒険型のポルトガル人の性格に合っていたようである(オランダ p.23)。彼らは労働を神聖視し仕事のために仕事をするというマックス・ヴェーバー流の考え方をせず、肉体労働を嫌っていた(住田 p.35 および 28)。ブラジルの広大な大原野を開拓するのには、このやり方が効果的であった。アフリカから「新大陸」に連れて来られた奴隷の総数は 1071 万人という。スペイン領アメリカ大陸・カリブ海に 529 万人、英領北米に 40 万人が輸入され、ブラジルには 486 万人が入った(鈴木 p.77)。ブラジルの奴隷解放は 1888 年のことで[5]、一国としては世界最大の輸入国になった。

この砂糖を作る大農園は一つの家父長的農村社会であり、農園主はセニョール・デ・エンジェーニョと呼ばれ、あたかも貴族のような存在であった[6]。また多数の奴隷が導入されたことがブラジル文化に大きな影響を与えることになった。歴史の視点からブラジル人を語ったセルジオ・ブアルケ・デ・オランダは、ポルトガル人によるカトリック教の導入、ブラジルの熱帯自然の中で先住民、黒人、ポルトガル人との異種族混淆が進んだことが、ブラジル社会のルーツになったと述べている(住田 p.24)。

スペインの支配下に入ったポルトガル

1580 年ポルトガルでアヴェス朝が断絶すると、スペインのフェリペ二世は母方の血縁を根拠に王位を主張し、ポルトガル王フィリペ一世(治 1581-1598)になった。そのことによってポルトガルはスペイン国王の統治下に入り、独立運動を始めていたオ

ランダと敵対する関係になった。フィリペ一世は当時アントウェルペンが製糖業の中心地であったことから、1598 年敵対国オランダ船がブラジルへ入港するのを再度禁止した。これに対し休戦(1609-1621)が空けると、「西インド会社」[7]はブラジルとの砂糖取引や奴隷貿易に直接乗り出すばかりか、1630 年からブラジル東北部のペルナンブコ一帯を占領した。ポルトガルでは、自分達の領地であるブラジルを失しなうことにいら立ちを深めていた。そうした時に1640 年スペインがカタルーニャの反乱鎮圧のために重税を課し、軍政改革、徴兵を行ったことから、それに反発するポルトガル人はブラサンガ家のドン・ジョアンを押し立てスペインの駐在使節を追い出し、再独立した(1668 年の「リスボン条約」で承認)。そして 1654 年独力でブラジルからオランダ人を追い出した。なおこの時追い出されたオランダ人はカリブ海のキュラソー島などに移り住み、1667 年の「ブレダ条約」[8]により北米のニューアムステルダム(現在のニューヨーク NY のこと)と交換にスリナムを手に入れると、そこにも移った。ブラジルの砂糖産業に対する影響はといえば、生産を始めた当初は本国の強制改宗令(1497 年)によってキリスト教に改宗した旧ユダヤ教徒が砂糖産業を支えていたものの(安村 p.45)、貿易をオランダに頼っていたことから、1670 年頃をピークに繁栄が下火になっていく。

金の発見と内陸部に領土を広げるブラジル

他方で、特に産業もなく開発の遅れていたブラジル南部について言えば、16 世紀中葉よりサンパウロ [9]で住民が、先住民のインジオ狩りや金の探索をする「バンデイラ」と呼ばれる奥地探検隊を盛んに組織するようになった。黒人奴隷に代わる安価な労働力として先住民を求めたのである。1588 年スペインの「無敵艦隊」に加わっていたポルトガル海軍が敗れ、奴隷輸送に支障をきたすようになると、一層先住民の価値が高まった。「バンデイラ」は 17 世紀初めにはパラナ河畔に進出し、ルート上に幾つもの町を作った。彼らの意図しないこの行動が、結果的にブラジルの国境を西に拡大することになる。1693 年彼らによってミナス・ジェライスで金が発見された(1727 年にはダイヤモンド)。すると、海岸部やポルトガル本国から内陸部の鉱山地帯への集団移動が起こる。ここでは砂金が川沿いや谷間の砂地から採集された。必要な物資は周辺地域から供給され、商業と運輸業が発展した。それは砂糖の東北部とは違い、開放的な社会であった。休日に働く奴隷も金を貯めて、自由な身分になることができた。東北部の大土地所有制の社会とは違っていた。この地域で大地主が出現するのは 18 世紀の後半に採鉱方式が必要になり、金の生産量が減少に向かい、農牧を目指す者が増えてきてからである。また金の発見によって経済の中心は東北部から南部に移り、道路も整備され、1763 年副王の首府がバイアからリオ・デ・ジャネイロに移された。

スペインとの国境を画定するポルトガル

「バンデイラ」の活動や経済活動が南部に移ることによって、スペインとポルトガルの間で確定していなかった境界の問題が発生する。「スペイン継承戦争(1702-1714)」を終わらせる「ユトレヒト条約」によって、

ブラジルはラ・プラタ河の岸辺のコロニア・ド・サクラメントの町を手に入れたが、アルゼンチンと国境を接することになり、境界で度々紛争になった。そこで両国は1750 年「マドリッド条約」を結び、その中でポルトガルはブラジルの広大な地域を西に拡大した。その国境画定には「バンデイラ」が進めた「実効占有 uti possidetis」の原則が有利に働いた(山田・鈴木 pp.54-56)。この条約でブラジルはコロニア・ド・サクラメントの町とラ・プラタ河の航行権を放棄する代わりに、イエズス会の教化村が多数あるミシオネス地方を手にした。それでも「七年戦争(1756-63)」でスペイン軍がアルゼンチンからブラジル南部を侵攻するなど境界紛争は続き、1777 年の「サン・イルデフォンソ条約」(未批准)によってポルトガルはコロニア・ド・サクラメントとミシオネス地方をスペインに返還する代わりに、「マドリッド条約」で認められた西と北の境界線を維持することになった。なお今日のような最終的な国境の確定には、19 世紀のウルグアイの独立、「パラグアイ戦争」などを待たねばならない。

ポルトガル文化が基調になったブラジル

このようにブラジルはポルトガルの植民地として始まった。その歴史的経緯からこの国はポルトガル文化が基調になっている。そのポルトガルであるが、この国は 11 世紀末にカスティリャ=レオン国王のアルフォンソ六世(治 1065-1109[カスティリャ国王としては 1072-1109])が、イスラム勢力との戦いで劣勢を挽回するために、娘テレサをフランスのブルゴーニュ地方の有力貴族であるアンリ・ド・ボルゴーニュと結婚させ、モンデーゴ川以北のポルトゥカーレ伯領、コインブラ伯領の経営を彼に委嘱したのが始まりである。ポルトガル、スペインの両国は、ヨーロッパと中東・アフリカを結び民族、文化が移動する際の十字路、橋渡しするイベリア半島に位置し、長い間歴史を共有してきた。つまり紀元前 2 世紀に侵入しこの地をヒスパニアないしイスパニアと呼んだローマ、5 世紀から支配した西ゴート族の時代から同じ文化圏にあった。その後 711 年から「後ウマイア朝」などイスラム教の勢力の支配が長く続いた。その文化が「新大陸」に移植されたことから、ブラジルとイスパノアメリカの文化が似通っていたとしても不思議ではない [10]。それは、王権を頂点とする封建主義、服従は規律の基礎であるとして(オランダ pp.14-15)カシケ(頭領)に従う社会風土、法、契約という中立的な行政制度よりも人間(すなわちアミーゴ[ともだち])関係を大切にする気風、ローマ帝国の時代に始まったカトリシズムを理念とする保守的な「キリスト教的一体性」(=反ユダヤ主義)、属人法に代わり法治主義と官僚による統治、奴隷を含む多民族社会、個の人格・美徳や自尊心・独立性を重んじ時には団結が害されることも辞さない気風(オランダ p.3 および p.11、渡部 p.201)などである。

ブラジル社会の特徴
ーイスパノアメリカとの比較でー

しかし「新大陸」では、スペイン語とポルトガル語という言語の違いばかりでなく、植民地としての異なる歴史、白人、先住民、黒人などの多人種、多民族社会であること、自然環境・風土の違いなどで、ミクロの視

点ではブラジルとイスパノアメリカに違いがあるのも事実である。筆者の経験からそれらをここにまとめてみた。

①主要産業はスペイン領が銀、ブラジルは砂糖

スペイン領アメリカでは、植民地時代銀鉱山を中心とする収奪型の経済が生まれた。南米大陸では、鉱山は高度のあるアンデス山脈で見つかった。またこの地域はインカ帝国があったところで、スペイン人はその先住民を労働力として農業、鉱業に利用することもできた。そこで彼等は、鉱山近郊の町、本国への積み出し港、港までの輸送ルート上に、王令により整然とした街並みの都市を作って住んだ。それを越えて東、つまり急峻な山を下ってブラジル側に進出するようなことは余りなかった。そのおかげでブラジルの「バンデイラ」が西に領土を拡大できたともいえる。

他方ポルトガル人は金銀が見つからなかったために、植民時代ブラジル東北部で砂糖農園を興した。町は主に輸出に便利な海岸部にできた。少し内陸に入ったところにある大荘園は、白人の農園主を中心とする一つの共同体・社会で、植民者達は散村の生活を楽しんだ。都市はポルトガル人にとって生活の場ではなかった(住田 p.31)。内陸部である「奥地」が発展するのは、南部で「バンデイラ」が労働力を求めてインジオ狩りを始め、ミナス・ジェライス地方で待望の金、ダイヤモンドなどが見つかり、大規模な内国移住が始まってからである。現在でも大きな町は海岸部にある。

②アフリカからきた黒人奴隷と多人種の混血

ブラジルはヨーロッパから移住してきた白人、アフリカ系黒人、先住民、東洋系などから成る混血の多民族国家・社会である。もともとブラジルにはトゥピー語族の先住民が広く住んでいたものの、人口密度が低く、狩猟採取を生業にし、イスパノアメリカのように国家も形成しなかった。また植民に際し多数のインジオが殺された。労働することにも慣れていなかった。砂糖農園の生産形態は多数の労働者を必要とするプランテーション型で、先住民の代わりに16世紀初頭から 19 世紀までアフリカから連れてこられたのが黒人奴隷である。

奴隷はポルトガル人の貿易業者がコンゴ、アンゴラ地域からブラジル東北部やリオ・デ・ジャネイロなどに陸揚げした。ポルトガル人には黒人と交わることに対する抵抗感がなかった(オランダ p.45)。その結果ブラジルではアフリカ系黒人との人種的混血、文化的融合、クレオール化が進んだ。ブラジルの東北部を中心とするこのクレオール化現象は、下記する環カリブ海地域とよく似ている。そしてアンゴラ系カンドンブレやウンバンダのアフロ・ブラジル宗教が生まれた。またアフリカ系宗教の儀礼において神格を呼び出すために演奏される多様なリズムがブラジル音楽の基盤の一つにもなった(旦 pp.68-69)。先住民文化と融合した形態もあるが、海岸部では盛大なカーニバルが行われ、黒人文化と融合したカリブ海のそれに近いものを見る。またアフリカ原産の黒目豆をすりつぶしたアカラジェ、隠元豆、豚の脂身、牛肉の干し肉などを良く煮込んだフェジョアーダ、赤いヤシ油とココナッツミルクを使うムケカなどの食文化が生まれた。筆者の好みの料理の一つである。

③ブラジルの多様な自然と人々の大国意識

スペイン領アメリカは南北大陸をまたいでいるという観点からすれば、植民地としては広大で多様な世界といえるが、一国単位で見るとブラジルの大陸性と多様性は際立っている。ブラジルは南米大陸の約半分を占めている。この国は 5 つの地方と文化[11]、感覚的には国からなる大陸国家である。国内で自己完結できるほど豊富な資源や食料も持っている。そこでブラジルでは、地域よって人々の生活スタイルに大きなばらつきがある。「大国意識」が強く、人々の意識する時間はゆっくりとしたリズムで流れている。そしてこの大地によって、少々のことでは物に動じず、儀式ばらずに気さくで鷹揚な「ブラジル人」気質が養われたとも言える。この大陸気質はスペイン語圏世界よりブラジルの方がはるかに強く、島国で小国の日本人にはなかなか理解し難い。しかしそこが好きだという「ブラキチ(狂)」も多い。また植民地時代の家父長制の名残からか、血と心の結びつきを大切にする家族主義が強く残っている社会である。

④ブラジル国民のアイデンティティの形成

ブラジルでは、植民地時代が始まった最初の 3、4 世紀の間、人々の生活はポルトガル文化の伝統が強い東北部の大農園を中心に行われて、農村の家父長的なものを基盤とした伝統が続いた(オランダ p.60)。しかしこの国は、ダルシー・リベイロが言うように、自然環境が地域によって大きく異なる 5 文化圏からなり、またミナス・ジェライスで金が見つかり、1806 年ポルトガル王室がリオ・デ・ジャネイロに移転してきて、この世紀の後半からサンパウロ地方でコーヒー生産が増加し多数の外国人移民が流入すると、東北部の農村主体から南部の都市経済が中心になった。するとますます多民族、多人種社会になって異文化の融合とアイデンティティの形成が難しくなる。人種・民族や自然環境の多様性こそブラジルのアイデンティティの本質ではないか考える者もいる。これに対し旧スペイン領植民地は、人種の数が限られており、先住民インディオが重きをなす社会では、先住民との混淆化が進んだ。メソアメリカ、アンデス山脈地帯など先住民の多い地域では先住民の影響が今も強く残っている。スペイン領アメリカでは早くも 16 世紀から大学の設置と印刷機の導入が行われ、イエズス会などによる先住民に対するキリスト教と教育の普及が図られた。そのおかげか、国民のアイデンティティの形成はブラジルより容易であると言える。もちろんそのことは、国の統治が容易であることを意味しない。

3. ヨーロッパ列強によるカリブの島の植民地化とクレオール文化

環カリブ海地域とは

それではラテンアメリカ・カリブで一つの世界を作っている環カリブ海地域について語る。このカリブ海は、植民地時代スペイン領アメリカ大陸、すなわちインディアスへの玄関口、必ず通らなければいけないことからボカ(スペイン語で口の意)と言われた。海流がメキシコ湾を南米大陸北岸から北米大陸南岸に向け時計回りに流れ、このルートが帆船の航路になった。この地域

は大陸部のイスパノアメリカやブラジルと比較して防衛が難しく、船でのアクセスが容易であったことから、ヨーロッパの新興国の侵食を受けて、これらの国の植民地になった。

環カリブ海地域とは、非独立国を含め「西インド諸島」(大・小アンティリヤス諸島 [12])とカリブ海を取り囲む大陸の沿岸地域を指す [13]。狭いながらも地理、地形、自然環境が非常に多様な地域である。ここでは、先住民、ヨーロッパ系白人、アフリカ系黒人、インド人、ジャワ島人などの多人種・多文化社会で、人種的・文化的混淆が進み、大陸部とは一味違う世界を作っている。この論稿では、通常イスパノアメリカに含まれるキューバ、ドミニカ共和国を除く、主にイギリス、フランス、オランダなどヨーロッパ列強の旧植民地、奴隷制を経験した島を対象としている(国本 pp.14-15)[14]。インド系が半数を占めるトリニダッド・トバゴなどを除きアフリカ系黒人が 9 割前後を占めているという特徴がある。前記したようにその歴史の成り立ちからブラジル東北部と似たところがある。

跳梁するカリブ海の海賊

カリブ海と言えば、我々はカリブの海賊のことを思い浮べる。スペインは「新大陸」を植民地にすると、ここがスペイン以外の国と交易することや新キリスト教徒などが入り込むことを禁じた。しかし本国からの商品供給だけでは到底植民者の需要を満たすことができず、スペイン以外の商人たちが禁を犯して植民者と密貿易をした。住民の方でもこれを歓迎した。これらの自由な交易者の中から早くも 16 世紀に入るとバッカニア [15]と呼ばれる海賊が生まれた。彼らにとり「トルデシーリャス線のかなたの平和」など、どうでも良かったのである。

またカリブ海がスペイン領植民地の大陸部から金、銀の富を本国に送るための航路となり、狭いメキシコ湾を通らざるを得なかったことから、スペインの防衛が手薄であることを幸いに、16 世紀前半から [16]フランスの私掠船 [17]が財宝を目当てに活動した。それが時には国家の後ろ盾を得て略奪行為も行った。それが激しくなるのは、1552 年カルロス一世とフランスのアンリ二世(治 1547-1559)と間のイタリアを巡る紛争が再燃してからである(エリオット p.146)。フランスの海賊達は金、銀を狙ってカリブ海を荒らし回った。その海賊も、フランス国内で「ユグノー戦争(1562-98)」がおこると、1560 年代以降下火になっていく。イギリスもエリザベス一世の時代の 1568 年メキシコ湾岸にあるサン・フアン・デ・ウルアを攻撃したのを嚆矢として(ペンローズ p.218)、カリブ海で海賊を働くようになる。ペルーとメキシコで銀ブームが始まったからである。

ジョン・ホーキンス(1532-95)や彼の遠い親戚にあたるフランシス・ドレイク(1543?-96)等がスペイン帝国の力を削ぐために奴隷貿易や海賊活動を行った。イギリスは「植民帝国こそがスペイン経済力の根源である」(エリオット p.149)と考えていた。ドレイクは 1571 年パナマ北岸の港町ノンブレ・デ・ディオスを襲撃し、1572 年から 1573 年の航海でカリブ海の南米大陸北岸部を荒らしまわった。1586 年にもサント・ドミンゴ、カルタヘナの町を略奪した。なお彼は 1577 年から 1580 年に地球

を一周し、1588 年にスペインの「無敵艦隊」を破った大役者の一人であったことで有名である。このようなカリブ海での海賊行為が、イギリスにアメリカ大陸で植民地の建設、大西洋支配の野望を育てたとも言える。そこに 1568 年スペインのフェリペ二世に反旗を翻し、貿易に利益を見つるオランダが加わることになる。1621 年に設立された「西インド会社」は 17 世紀の第２・四半期にかけてカリブ海で海賊行為、砂糖貿易、密貿易を盛んに行なった。例えば1628年ピート・ヘイン(1578-1629)が31隻の艦隊を率いてキューバのマタンサス港でメキシコからの財宝を積んだ船隊を拿捕した話は有名である。まさにカリブ海の波高しである。またフェリペ三世(治 1598-1621)の時代にアンダルシアなどから追放された「モリスコ」[18]がモロッコのサレ(ラバト近郊の「モリスコ」主体の港町)やアルジェリアを基地にスペイン近海で「新大陸」からの財宝を積む帰船を襲った。この海賊活動がスペインの植民地体制を揺るがし、結果的にイギリスとフランスの「西インド諸島」で島の領有争いを招く。

陰りを見せ始めたスペインの覇権

「新大陸」、就中「西インド諸島」は、17世紀からヨーロッパで起こる紛争の影響を受け、列強の領土争いの舞台となる。というのも、新興国のオランダ、次いでフランス、イギリスが台頭し、この地域がブラジルに並ぶ砂糖の一大生産地になったからである。スペインが「新大陸」をよく防衛するだけの国力を持っていた間は良かったが、国力が衰えると、スペインにはもはやカリブ海の排他的支配権を維持する力はなかった。そしてフランスのフランソワ一世が、太陽の光は他のあらゆる人々に注ぐのと同じように、自分にもあたるはずだと語った新世界、就中「西インド諸島」は侵食を受けた。

スペインは、フェリペ三世、フェリペ四世(治 1621-1665)の時代になると、食糧危機、ペストの蔓延、国内経済の衰退、「モリスコ」の追放(1609-1614)などの影響を受け、また 16 世紀末をピークにメキシコ、ペルーから銀の流入の減少もあって破産状態に陥る。それにもかかわらずフェリペ四世の寵臣オリバーレス伯侯爵(任 1621-1643)は、名声維持のために積極的な対外政策を進め、1621 年ネーデルラントとの休戦が終わると戦争を再開し、ドイツ(神聖ローマ帝国)を舞台とするプロテスタントの貴族が起こした「三十年戦争(1618-48)」に干渉した。そのような中でフェリペ二世の時から続いたポルトガルとの「同君連合」もカタルーニャでの反乱を機に瓦解し、1643 年「ロクロワの戦い」[19]ではオランダのプロテスタントに味方するフランスに大敗北を喫した。

結局スペインは「三十年戦争」の後始末をつける 1648 年の「ミュンスター講和条約」でオランダの独立を承認し、1659 年の「ピレネー条約」でフランスと講和し、カタルーニャの領土の一部を割譲するとともに、フェリペ四世の長女マリア・テレサをフランスのブルボン朝で頂点を築いたルイ十四世(治 1643-1715、1661 年から親政)の妃として嫁がせることになる。こうしてスペインは過去の栄光の座からすべり落ちる。そして 18 世紀初め、ルイ十四世は故妃がカルロス二世(治 1665-1700)の腹違い

の姉であることを口実に、孫のアンジュー公フィリップをスペイン王に推すと、ヨーロッパ中を巻き込む「スペイン継承戦争(1701-1714)」がおこり、1713 年フランスは各国と「ユトレヒト条約」を結んだ。翌年にスペインと和平し、それによってフェリペ五世(治 1700-1724, 1724-1746)を始祖とする今のブルボン朝になった。

カリブ海の島の領有を決める新興国の争い

この項の冒頭にて、環カリブ海地域にはヨーロッパの旧植民地である多数の島嶼国があることを知った。どうしてこのような小さな島で構成される地域になったかを理解するためには、植民地時代にまでさかのぼる必要がある。

オランダ、イギリス、フランスなどの新興国は、イギリスとフランスの百年戦争(1339-1453)、王位を巡る争い、新旧の宗教対立などによって長く確固とした王権を築くことができなかった。それでも 17 世紀に入る頃には、「新大陸」で植民に乗り出す国内体制を整えた。するとこれらの国はスペインの勢力が及んでいない小アンティル諸島などにも植民地獲得に乗り出した。

その時カリブ海が砂糖という富を生産するのに好適地であることに気付き、17世紀半ばから砂糖を生産し始めた。すると「西インド諸島」はオランダ、イギリス、フランスなどの新興国が島の領有権を競い合う闘争の場になる。最初に勢力を伸ばしたのはスペインから独立し、17世紀経済的に繁栄するオランダであったが、英蘭戦争で脱落する。その後 1 世紀半の間欧州は「三十年戦争」、スペイン領ネーデルラントやオランダに対するルイ一四世の侵略戦争、「スペイン継承戦争」、「オーストリア継承戦争(1740-1748)」など各国が入り乱れての政治的混乱が続き、「ヨーロッパの全般的危機」を招いた。それでも英仏の二強は海外で「第二次英仏百年戦争」を戦い、「西インド諸島」の争奪戦を続けた。そしてスペイン領植民地を除き、18世紀後半になってヨーロッパの主要国を巻き込む七年戦争(1756-1763)」(海外では「フレンチ・インディアン戦争」)、アメリカ独立戦争(1775-1783)、フランス革命・ナポレオン戦争を経て、最終的な島の領有の構図が固まっていく。最後に勝ったのはいち早く産業革命を経験し、海 軍力で優るイギリスであった(10 カ国が旧英国植民地)。この島の争奪戦の模様は、読者には少し細かすぎると思われるので、文末の付論にまとめておいた。

砂糖生産に必要とされたアフリカ人奴隷

コロンブスがカリブ海に到達して、旧世界が「新大陸」で探し求めたのは金、銀であった。ところがエスパニョーラ島では 1520 年代まで金がとれたが、その後生産量が急激に減少した。スペイン人は小島の小アンティル諸島には目もくれなかった。しかしこれらの島で富を生むようになったのが当時貴重品扱いをされていた砂糖である。カリブ海は気候的に砂糖の栽培に適していたのである。ちなみに砂糖キビは最初コロンブスが 1493 年の第二次航海でスペイン領のカナリア諸島からエスパニョーラ島に持ち込んだものである。1516 年ゴンサロ・デ・ベドーサが最初の製糖工場を建設した(ウィリアムズ p.18)。それは大西洋諸島で行われていた黒人奴隷を使うプラン

テーション方式であった。スペイン人にとって奴隷を使うのは、13世紀の『七部法典』[20]にも謳われるなど、馴染みのある社会的伝統で、それは当時ヨーロッパの一般認識でもあった[21]。カリブ海で先住民が厳しい労働と疫病で急速に人口を減少させると、スペインは 1501 年土着民に代わる労働力として本国からキリスト教徒のニグロ奴隷、1513 年からは王室に税金を払う許可状制により西アフリカのポルトガル領植民地から奴隷を連れてくることを考えた。しかしエスパニョーラ島で始めた砂糖業はその後余り発展しなかった。スペイン人植民者と資本が大アンティル諸島からアメリカ大陸に移っていったのが原因と推測される。

カリブ海の砂糖業は 17 世紀半ばから小アンティル諸島で興隆することになる。まず英領バルバドス島から始まり、仏領グァドループ、マルティニクにも広まった。これらの島を領有したイギリス人、フランス人達は、当初白人奉公人[22]、黒人奴隷、家畜を使ってプランテーションという農業企業体の経営方式で粗糖、糖蜜、ラム酒を作り、大きな利潤を得た。ところが 1640 年頃から砂糖生産のために大量の労働力が必要になると、アフリカから奴隷を輸入するようになる。そして黒人奴隷を使う方式が生産の主体になる。奴隷の輸入には最初個人や団体に独占的許可状が与えられたが、1580 年フェリペ二世がポルトガル王になると、インディアス各地に確実に奴隷を届けるために 1595 年から 1640 年まで請負制度(アシエント制)になり、ポルトガル人に権利が与えられた。その後オランダが、西アフリカで 1482 年以来ポルトガル領の奴隷基地のエルミナを 1637 年に、1575 年からポルトガルの支配下にあったアンゴラを 1648 年に奪って、「西インド会社」を使って奴隷貿易を行った。1654 年オランダ人はブラジルを追い出されるものの、1661 年ポルトガルとの和平条約によって西アフリカ全域で奴隷貿易を行うことを認められ、1640 年から 1692 年までの半世紀の間、奴隷貿易を大々的に行った。また彼らが小アンティル諸島のイギリス人やフランス人植民者に砂糖の栽培法と製糖法を教え、資本を提供した。イギリスはなかなかオランダが支配する奴隷貿易に入り込めなかったが、王制復古後の 1672 年「イギリス王立アフリカ会社」が独占的特権を認めるチャターを得て奴隷貿易に割って入り、イギリス領植民地に奴隷を供給した。「スペイン継承戦争」の講和条約「ユトレヒト条約」(1713 年)で「黒人請負契約に関する条約」を結ぶと、「南海会社」が独占的に奴隷貿易を行い、ジャマイカとバルバドスを奴隷の集配基地にした(メジャフェ pp.80-81)。商業的にもニグロ貿易は大きな利潤を生んだ。

英国は、1655 年にジャマイカをイギリス領にすると、ここを 18 世紀にかけて英領カリブで最大の砂糖産地にする。ジャマイカでの砂糖生産は 1774 年が頂点であった。他方フランスは、グァドループ、マルティニクばかりでなく、1697 年スペインからハイチを譲渡されると、そこを砂糖生産の基地にした。イギリスはアメリカ独立戦争でジャマイカから米国への砂糖の輸出を禁じ、そのおかげでハイチの生産量が伸びた。しかしここもハイチ独立闘争(1791-1804)でインフラの破壊を被ると、キューバで砂糖生産が盛んになる。19 世紀後半か

ら世紀転換期にかけてアメリカ合衆国の投資もあって輸出が大いに伸びた。ドミニカ共和国の砂糖生産はキューバの「第一次独立戦争(1868-1878)」で逃れてきたキューバ人達が始めたものである。

砂糖生産が伸びるとともにカリブ海の島々で奴隷の数が増加した。1860 年代にキューバを最後に奴隷制が禁止されるまで、約 4 世紀弱の間に、小アンティリャス諸島、ジャマイカ、エスパニョーラ島、キューバ、プエルト・リコ、カリブ海沿岸部に輸入された奴隷の数は 529 万人とも言われる。そして奴隷制廃止後に年季奉公として移住してきたインド系住民の多いトリニダード・トバゴ、ガイアナ、そしてスリナム(インド系の他に旧オランダ領であることからジャワ島系移民も多い)、ヨーロッパ系のメノナイト信徒集団が多いベリーズ、混血の多いセントビンセント・グレナディーンを除き、アフリカ系の人口が 8 割以上を占めている。

重商主義の時代大西洋をまたぐ「三角貿易」

コロンブスの「新大陸」到達によって、ヨーロッパとカリブ海との間に大西洋という東と西を結ぶ「途切れることのない連絡路」ができた。その後この交通の道はアフリカ大陸をも結びつけた。海はどこからでも誰でも入ることのできる空間であり、また紐帯である。植民地時代の「新大陸」では、ヨーロッパ各国の海賊や貿易商が盛んに密貿易をし、カリブ海で島を領有し、大西洋経済圏ができた。そうした中で生まれたのが通称「三角貿易」である。

「三角貿易」とは、ヨーロッパで一度輸入した東インド産の綿布、金属製品、銃器などを積んで出航した船がアフリカ西海岸で奴隷という商品と交換する。これが三角形の一辺である。第二辺はいわゆる「中間航路」と言われるもので、西アフリカから「西インド諸島」などへの奴隷の移送である(但しブラジルの間ではアンゴラなどへ糖蜜からできる火酒、タバコ、インドのゴアで調達した綿布を送って奴隷を輸入する双方向の貿易があった)。最後の一辺は貿易船が奴隷との交換により受け取った砂糖、その他のカリブ海地方の物産をヨーロッパに持ち帰る航海で、これで三辺ができあがる。この「三角貿易」の核はもちろん「中間航路」の奴隷貿易であった。その他金、象牙、染料(dye- wood)、獣皮、蜜ろうなどのアフリカの特産物が直接ヨーロッパに直接輸入されもした。

そして「西インド諸島」が本国からの鉄、火器、真鍮、ワインなどの市場になるという意味もあった。1697 年には「三角貿易」がイギリスの総輸入のほぼ 10%、総輸出でも 4%以上を占めた(ウィリアムズ p.180)。そして英領「西インド諸島」からイギリスの輸入(1714-73 年)は、北米大陸植民地とのそれの約 2 倍、輸出は 65%というシェアーであった(同左 p.193)。フランスの場合、アンティル諸島との貿易(1715 年)が全体の６分の 1 を占めた。比較的小さな島の幾つかを失ってからも、その 3 分の 1 がこの地域との関係であった(同左 p.195)。そして重商主義のこの時代、「三角貿易」はイギリスのブリストル、フランスのボルドーを発展させ、リヴァプールやフランスのナントの精糖業、繊維場、海運業と造船業を促進し、生まれた膨大な利潤は本国の産業に再投資された。このように今では信じ難い

ことであるが、この時代ヨーロッパにとって「西インド諸島」はそれほど経済的に重要であった。

今でも宗主国の痕跡を残すカリブ海の政治

強制的に連れて来られた黒人奴隷は、砂糖プランテーションで働かせられ、そこでは「人種的従属と不平等の原理」が支配していた。つまりここでは、支配階級の少数の白人、それに続く白人奉公人、黒人と白人の混血ムラート、あとは多数の黒人奴隷という堅固なピラミッド型社会ができた。奴隷制度は英領「西インド諸島」で 1834 年に廃止されたが、白人は人口数的には 1 割に満たないものの、今でも国内で政治的経済的影響力が強い。植民地時代の残照である(伊藤 pp.132-133)。ここはプランテーションの集合体でできあがったような社会で、この社会構造の原理は現在にまで継承されている(長嶋 p.88)。ところが近代になると黒人の人権、自立、地位向上を求める様々な政治運動が起こり、アフリカ系として人々の意識が高まっている。しかしインド人、中国人、イスラム教のジャワ系など人種的・宗教的に多様で、政治的理念や利害の対立があって、カリブ地域で人種・宗教・文化を紐帯とする連帯の形成は難しく、まだ共通のアイデンティティというようなものは生まれていない(松本 pp.102-105)。それでも、ともにヨーロッパ諸国の奴隷制や植民地経営による「負の遺産」を持つという共通項とこの地域が共有する歴史と文化が人々を結び付けているのは事実である。

アフロカリブが生んだクレオール文化

この地域には、奴隷として強制的に拉致され、出身地域の言語や文化を捨てさせられたにもかかわらず、持ち込んだアフリカ的なものが、ヨーロッパの旧宗主国の文化との接触、混淆によって生まれたクレオールと呼ばれる「西インド諸島」独有の文化がある [23]。アフリカから黒人奴隷がもたらした文化はキリスト教にすら影響を与えた。それは、単なるアフリカ文化がヨーロッパ文化と混交融合したというだけではなく、カリブ海という新しい環境に適応しつつ、相互に影響を及ぼし合う中で生成されたもので、創造的な「文化変容」である(長嶋 p.97)。

こうした歴史環境の中で生まれたクレオール文化であるが、その内容の幾つかを説明すると、黒人が人種的に多数派であることから黒人を意識した混血文化の「カリブ海文学」、サハラ以南のアフリカから奴隷とともにもたらされた拍節の強弱のパターンを変化させて独特の効果を出すシンコペーション、呪術的なリピート、それらが宗主国の文化と混じって生まれたアフロカリービアン音楽とダンスなどがある。ルンバ、サンバ、マンボといったラテンのリズムは、アフリカの影響を受けて素朴で土着的な芸術であるアフロカリービアン音楽が基調になっていると言われる。ジャマイカのレギエ、トリニダードのカリプソも影響を受けている。トリニダードなどカリブの島で毎年 1 月から 3 月に行われて外国人観光客を集める、西アフリカ文化が混じるカトリック教徒の宗教的なお祭りである、飲めや唄え、踊れの世俗的な祝祭であるカーニバルも知られている。また植民地の住民、特に黒人が話す言葉として、それぞれ異なる母語を持つ人々同士の意思疎通のために、ヨ

ーロッパの言語を単純化して生まれたクレオール語(ハイチでは母語)がある。もはや優位を占めているとは言えないまでも、文化的に依然重要なのが、「アフリカニズム」の要素が強い諸信仰、儀礼、「呪術」(長嶋 pp.97-99)である。またキューバのサンテリア、ハイチの民間信仰であるヴードゥー[24]などがある。

4. まとめ
ーブラジルと環カリブ海諸国の世界とはー

アメリカ合衆国とカナダを除く「新大陸」のラテンアメリカ・カリブの世界は、スペイン語圏のイスパノアメリカ、ポルトガル領であったブラジル、環カリブ海諸国という 3 つの世界で構成されている。

筆者は、ブラジルは隣り合わせのイスパノアメリカの社会、文化と違うところよりも類似している点が多いのではないかと感じている。それというのも、ブラジルはイベリア半島でスペインと文化を同じくするポルトガルを母国とし、その植民地時代が長く続いたからである。もちろんミクロの視点ではイスパノアメリカとブラジルでは違うところも多々ある。それは自然環境、人種・民族、辿ってきた歴史の違いなどからきている。またブラジル東北部に砂糖生産のために多数のアフリカ人奴隷が連れてこられ、その後旧大陸からの新規移民も加わって多民族・多文化社会になったこと、広大な国土と多様な自然環境の影響が大きいように思われる。これらの条件が多様な社会で、大陸気質という人々のメンタリティや今の文化を作った。それでもともにイベリア半島の共通の文化をルーツとしていることからブラジルとイスパノアメリカは、国としての違いよりも、類似性やラテンアメリカ世界の一員として仲間意識の方が勝っており、現在でも強い連帯感で結ばれている(詳細は渡邉 pp.138-144 を参照)。

これに対し、旧スペイン領であったキューバとドミニカ共和国を除く環カリブ海諸国とイスパノアメリカとの違いは、ブラジルの場合より大きいように思われる。というのも、カリブ海が当時貴重かつ換金作物であった砂糖生産に適した気象条件であったことから、17、18 世紀にイギリス、フランスなどが島を植民地にしたという歴史を経ているからである。そこで今日見られるような多数の小さな国が生まれた。土着民が急速に減少したばかりに、宗主国は労働力としてアフリカから黒人奴隷を連れてきた。そして黒人はプランテーション型の砂糖農園で強制的に働かされた。白人の農園主数は少なかったので、黒人の比率が高くなり、現在多くの国で 9 割前後を占めている。黒人奴隷は身一つで故郷から何も持ってくることを許されなかったが、文化だけは雇い主の白人も消し去ることはできなかったとみえて、ここではアフリカ文化の影響を強く受け、ヨーロッパ文化・キリスト教との間で混淆が進み、クレオール化現象が起こった。この新たに生まれた混淆文化はこの地域特有のものになった。

このように同じラテンアメリカ・カリブ世界とはいっても、一括りに語ることは難しく、多様性に富んだ世界である。

付論

カリブ海の島の植民地化と争奪戦

[イギリス] のヘンリー七世(治 1485-1509)は、実質的な占拠こそが問題であるとして、1496 年ジョン・カボットに北アメリカの探検航海の特許状を与えた。この地域は鱈と毛皮の資源が豊富であった。イギリスはスペインの成功体験に刺激されて、16 世紀後半からアジアに到るルートを求めて探検隊を北アメリカに派遣するが、あまりうまくいかなった。植民については、スチュアート朝のジェームズ一世(治 1603-1625)の時代になって本格化し、1607 年にジェームズタウンを建設する。1620 年には有名なピルグリム・ファーザーズがメイフラワー号でニューイングランドに渡った。

カリブ海地域について言えば、エリザベス女王の時代に強国のスペインと袂を分かち、その矛先をカリブ海に向け、海賊・私掠船を使ってスペインの財宝を奪った。その後イギリスは小アンティル諸島、南米北岸のガイアナへの植民を始めた。この地域で最初に関心を持ったのはバルバドスで、1627 年に植民した。この島は 17 世紀後半には奴隷取引の中心地になり、砂糖プランテーションが興隆した。こうした経緯からバルバドスは今でもこの地域で政治的に重きをなしている。セントキッツ(=セントクリストファー)、ネーヴィス、アンティグア、モントセラトの各島にも進出した。トバゴ島は、「新大陸」への海路にあることから何度もオランダ、フランス、イギリスなどの間で奪い合いになるが、1814 年の「パリ条約」(注 1)でイギリス領になり、1889 年トリニダードに統合された。1770 年代からフランス系移民が増えていたトリニダードは 1797 年からイギリスの植民地であった(1802 年の「アミアン和約」(注 2)で正式化)。

(注 1) この「パリ条約」は、ナポレオン戦争中の 1814 年 5 月フランス王ルイ一八世と第六次対仏同盟との間で講和した条約である。

(注 2) 「アミアン和約」はフランス革命中の 1802 年にナポレオンとイギリスの間で結ばれた講和条約である。これによって第二次対仏同盟は解消されることになる。

1644 年の「清教徒革命」で誕生した共和政のオリバー・クロムウェル護国卿は 1655 年ジャマイカの島を占拠した。そしてポート・ロイヤルの町をベースに密貿易と海賊行為を行った。最後の大物海賊であるヘンリー・モーガン(1635-88)はここから 1668 年キューバ、パナマのポルトベリョや翌年南米北岸のマラカイボ、1671 年にパナマの町を襲った(注 3)。何とかして「新大陸」に対する海賊行為を止めさせたいスペインは、1670 年にアメリカでの全て紛争を解決するための「マドリッド条約」(注 3)を結び、ジャマイカとケイマン諸島の英領化を容認する代わりに、英・西の両国は相互に略奪を控え、イギリスがバカニアに賦与した略奪の特許状を撤回すること、さらにこの規定に違反する者を処罰することで合意した(ウィリアムズ p.97)(注 4)。

(注 3) 「マドリッド条約」はこのパナマ襲撃の数カ月前の 1670 年に結ばれており、これに違反していたことからモーガンはイギリスに護送されたが、何ら咎められることはなく、チャールズ二世(治 1660-1685)からナイトに叙され、ジャマイカの副総督に任命された(ゴス p.210)。

(注 4)海賊バッカニアが最後に姿を見せたのは、1697 年スペインと戦争をしていたルイ十四世がジャン・ベルナール・デジャンにカルタヘナを襲わせた時である(ゴス p.226)。

[フランス] はブルボン王朝になると、1598 年アンリ四世(治 1589-1610)は「ナントの勅令」で 36 年に及ぶ「ユグノー戦争」を終結させた。国内政治が安定すると、1608 年マニュエル・ド・シャンプランが北米でケベックの町を創建した。ルイ一三世(治 1610-1643)の世になり、王権の強化に貢献したリシュリュー宰相時代が始まる直前の 1623 年にサンクリストフ島(=セントクリストファー)に上陸を果たした。この島にはそれ以前にイングランド人が上陸しており(大峰 p.242)、1713 年公式に英領になるまで両国の間で領有権が移動した。またマルティニクとグァドループ(ともに 1635 年)を植民地にし、年季奉公人と奴隷を使って砂糖を作り始めた。サント・リシュリュー島(セントルシア名に変わり、1814 年 5 月の「パリ条約」で英領に)、グレナダ(「七年戦争」(注 5)を講和する 1763 年の英・仏・西間の「パリ条約」よって英領に)、サンマルタン島(注 6)などを植民地にし、反スペイン活動を行った。英、仏が領有を争ったドミニカ島とセントヴィンセント島はフランス領になった(1763 年の「パリ条約」でともに英領に)。

(注 5) 神聖ローマ皇帝のカール六世が死没した後の「オーストリア継承戦争」で、シュレジェン地方の領有が認められなかったマシア・テレジアは、その奪回を狙ってフランスと同盟した。他方イギリスと結ぶプロイセンのフリードリヒ二世は、フランスのルイ一五世(治 1715-1774)がオーストリアと同盟を結んだのに機先を制して 1756 年ザクセンに侵入して始まったのが「七年戦争」である。英仏の戦いは主に海外植民地で行われ、フランスは講和の「パリ条約」で北米カナダとルイジアナの植民地を失った。残るは「西インド諸島」の一部を保持するのみで、フランスはこの戦争で「新大陸」の植民地獲得競争から実質的に脱落した。

(注 6) この伊豆大島ほどのサンマルタン島(蘭語ではシントマールテン島)は、オランダ人も入植し、1648 年北部のフレンチ・サイド(フランスの海外自治体)と南部のダッチ・サイド(オランダ王国を構成する自治国)になるという、めずらしい島である。

フランス人のバッカニアは 1600 年前からエスパニョーラ島西部に住みつき、そこを追い出されると 1630 年キューバ島との間にあり、北上する海流と南下する流れを利用できるというウィンドワード海峡のトルトゥガ島をねぐらとし、スペインの銀の輸送船や町を襲うなどカリブ海を荒らしまわった。このトルトゥガ島はセントキッツ島のフランス人ルヴァッスールの支配下に入り、80 年間にわたって栄えた(ゴス pp.193-194)。この島がスペイン人により再征服されると、再びエスパニョーラ島の西部に侵入し、タバコと砂糖黍を栽培するようになり、ルイ一四世時代の「ライスワイク条約」(注 7)により正式にスペインから割譲された。それがサンドマング(現在のハイチ)で、後にラテンアメリカで最初の独立国になる。

(注 7) ルイ一四世は、領土拡大政策を進め、スペイン領南ネーデルラントに侵入したフランドル戦争(1667-1668)、オランダ戦争(1672 年-1678)を戦い、1688 年にはライン河流域に侵入し「アウクスブルク同盟戦争(1688-1697)」を仕掛ける。この戦争でフランスは次第に不利となり、イギリス、オランダ、スペインと「ライスワイク条約」を結んだ。

[オランダ] は 1568 年から独立運動を始め、1648 年の「ウエストファリア条約」でスペインから正式に独立するが、1590 年頃より海外貿易に関心を持つようになった。当初は

アジア方面に関心を向けた。その後カリブ海や南米ブラジルにも目を向ける。カリブ海では、1634 年キュラソー島やアルバ島を占拠した。そしてキュラソーをカリブ海の経済活動の基地、奴隷貿易・取引の中心地にした。シントマールテン島とサバ島(ともに 1678 年「西インド会社」の直轄領に)も占領した。また南米北岸のスリナムも 1667 年の「ブレダ条約」でイギリスから領有権を獲得した。仏と蘭が領有を争ったシントエースタティウス島は 1675 年以降自由港としてオランダ商人の貨物集積港となった。現在もオランダ領である。

[デンマーク] はヴァージン諸島の一角であるセント・トマス島を拓き、セント・ジョン島を領有し、1733 年にはセントクロイ島をフランスから購入したが、1917 年パナマ運河が開通した時に米国に売却した。現在の米領ヴァージン諸島である。

参考文献

秋田茂(2012)　『イギリス帝国の歴史』、中央公論新社。

東明彦(1984)　「ブラジル」　増田義郎・山田善郎・染田秀藤編　『ラテンアメリカ世界』、世界思想社。

伊藤みちる(2017)　「環カリブ海地域のヨーロッパ系白人社会」　国本伊代編　『カリブ海世界を知るための 70 章』、明石書店。

ウィリアムズ, エリック(川北稔訳)(1978)　『コロンブスからカストロまで Ⅰ カリブ海域史,1492-1969』、岩波書店。

エリオット, ジョン・ハクスタブル(越智武臣・川北稔訳) (1975) 『旧世界と新世界 1492-1650』、岩波書店。

大峰真理(2022)　「一七世紀フランスの初期植民会社と小アンンティル諸島」　荒川正晴・大黒俊二・小川幸司・木畑洋一・冨谷至・中野聡・永原陽子・林佳世子・弘末雅士・安村直巳・吉澤誠一郎編　『世界史 14　南北アメリカ大陸~一七世紀』、岩波書店。

オランダ, セルジオ・ブアルケ・デ(池上岑夫)(1971)　『真心と冒険－ラテン的世界―』、新世界社。

ギブソン, チャールズ(染田秀藤訳)(1981) 『イスパノアメリカ―植民地時代―』、平凡社。

国本伊代(2017)　「21 世紀のカリブ海世界」　国本伊代編　『カリブ海世界を知るための 70 章』、明石書店。

越川芳明(2022)　『カリブ海の黒い神々』、作品社。

ゴス, フィリップ(朝比奈一郎訳)(1994)　『海賊の世界史』、リブロポート。

コーディングリ, ディヴィッド(増田義郎監修、増田義郎・竹内和世訳)(2000)　『図説 海賊大全』、東洋書林。

近藤仁之(2011)　『ラテンアメリカ銀と近世資本主義』、行路社。

佐藤文則(2003)　『ダンシング・ヴ―ドゥー　ハイチを彩る精霊たち』、凱風社。

鈴木茂(2014)　「「黒い積み荷」の往還」　歴史学研究会編　『資料から考える 世界史 20

講』、岩波書店。
住田育法(2022)　「ブラジルの起源を探る」　小池洋一・子安昭子・田村梨花編　『ブラジルの社会思想』、現代企画室。
田尻鉄也(1999)　『ブラジル社会の歴史物語』、日本マーケティング教育センター。
立石博高編(2022)　『スペイン・ポルトガル史 上』、山川出版社。
旦敬介(2022)　「アフリカ人奴隷」　伊藤秋仁・岸和田仁編著　『ブラジルの歴史を知るための 50 章』、明石書店。
長嶋佳子(1991)　「奴隷たちの世界」　石塚道子編　『カリブ海世界』、世界思想社。
中村隆之(2017)　「古くて新しいクレオール」　国本伊代編　『カリブ海世界を知るための 70 章』、明石書店。
フレイレ, ジルベルト(鈴木茂訳)(2005)　『大邸宅と奴隷小屋』、日本経済評論社。
ベイリン, バーナード(和田光弘・森丈夫訳)(2007)　『アトランティック・ヒストリー』、名古屋大学出版会。
ペンローズ, ボイス(荒尾克己訳)(1985)　『大航海時代 旅と発見の二世紀』、筑摩書房。
松本八重子(2017)　「アフロカリブ海世界」　国本伊代編　『カリブ海世界を知るための 70 章』、明石書店。
三田千代子(2022)　「ブラジルの新たな民族の形成」　小池洋一・子安昭子・田村梨花編　『ブラジルの社会思想』、現代企画室。
ミンツ, シドニー・W(川北稔・和田光弘訳)(1988)　『甘さの権力―砂糖が語る近代史』、平凡社。
メジャフェ, R.(清水透訳)(1979)　『ラテンアメリカと奴隷制』、岩波書店。
安村直己 (2022)　「南北アメリカ大陸から見た世界史」　荒川正晴・大黒俊二・小川幸司・木畑洋一・冨谷至・中野聡・永原陽子・林佳世子・弘末雅士・安村直巳・吉澤誠一郎編　『世界史 14　南北アメリカ大陸~一七世紀』、岩波書店。
矢内原勝・小田英郎編(1989)　『アフリカラテンアメリカ関係の史的展開』、平凡社。
山田睦夫・鈴木茂編(2022)　『ブラジル史』、山川出版社。
渡部和男(2023)　『スペインと中南米の絆』、彩流社。
渡邉利夫(2021)『国際政治のなかの中南米史』、彩流社。

注

[1] 「新大陸」のアメリカ銀がヨーロッパで「価格革命」を招いたこと、賃金上昇と物価上昇の時差からくる利潤が資本主義の発達を促したというアール・J・ハミルトンの説は良く知られているところであるが、その考え方には未だ確認すべき色々な問題があるようである(エリオット pp.107-109)。

[2] バーナード・ベイリンは、価値観と文化を共有している今日の大西洋文明の基盤には、植民地時代、特に 18 世紀にできた大西洋地域の緊密な政治的、経済的、社会的関係よりなる「アトランティック・ヒス

トリー」があり、一つの新世界へと統合されたと述べている(ベイリンの『アトランティック・ヒストリー』を参照)。筆者は、多様な環大西洋地域諸国が現在でも価値観や文化を共有しているという考え方に全面的には賛成し難いが、植民地時代に緊密な社会文化関係の基礎が築かれたことは納得できるところであり、ブラジル、カリブ海地域の理解に役立つので、このパラダイムで説明する。

[3] ブラジルの名は、沿岸部一帯に自生していた赤色染料の原料となる蘇芳パウ・ブラジル(ブラジルの木)から由来する。

[4] 1534 年から 1536 年にかけてブラジルは海岸線に沿って 15 のカビタニアという区画に分割し、ドナタリオ(受封者)という称号とともにポルトガルの 12 人の貴族に委譲した(東 pp.69-70)。

[5] 英国は、1826 年からブラジルに奴隷貿易の停止を迫り、1850 年には海軍力を使って妨害した。アメリカ合衆国の奴隷解放(1863 年)があって、パラグアイ戦争(1865 年-1870 年)帰りの黒人兵士や都市中間層出の将校が帝政に批判的で、奴隷の反乱鎮圧に抵抗するなど、内外世論の高まりやコーヒー生産に必要な労働力をイタリア系移民に見つけることで、1888 年奴隷制を即時に無償で廃止する「黄金法」が公布された(山田・鈴木 pp.87-101)。

[6] 砂糖農園は、農園主が居住する大邸宅(カーザ・グランデ)、奴隷の住居(センザーラ)、精糖工場(エンジェーニョ)などからなっていた。社会学者で文化人類学者のジルベルト・フレイレは、その人間関係が家父長的ながらも温情主義的、慈悲的となったのは、砂糖を生産する必要性から生まれたものであったと書いている(フレイレ, ジルベルト著『大邸宅と奴隷小屋』を参照)。

[7] オランダは、スペインから独立する「八十年戦争」、その後英仏との度重なる戦争にもかかわらず、海外貿易、漁業、造船業、織物工業などで経済を発展させ、17 世紀に黄金時代を築いた。「西インド会社」は 1621 年に貿易会社を装って設立された私掠業会社で、砂糖生産・貿易、奴隷貿易に係わった(1674 年解散)。スペインと戦争している関係上ポルトガル経由でアジアの香辛料を輸入するのが難しくなったことから 1602 年に設立されたのが有名な「東インド会社」で、この会社はアジアでポルトガルの勢力を追い出して植民地経営、アジア内の貿易も手広く行い、莫大な利益を上げた。1799 年に破産した。

[8] 17 世紀経済的覇権を巡ってイギリスとオランダとの抗争が高まる中で、イギリスが仕掛けた第二次英蘭戦争後の講和条約が「ブレダ条約」である。イギリスは NY を獲得したものの、航海法の適用を緩めることになった。

[9] サンパウロは、1554 年イエズス会がサンヴィセントから少し内陸に入ったピラチニンガ高原に町を建設したのが始まりで、この地はティエテ川などの河川水系が利用できるという利便性を持っていた。

[10] 近世までのスペインとポルトガルの歴史が共通する部分が多いとはいえ、それが親密であるということを意味しないようだ。ポルトガルは歴史的にスペインから常に圧力を受けてきたからか、スペインに対する国民感情は必ずしも良くない。

[11] ブラジルの人類学者ダルシー・リベイロは、東北部の砂糖農園を中心に展開したクリオウロ文化、サンパウロを中心にコーヒー大農園、工業化へと産業が発達した地域のカイピーラ文化、東北部の乾燥地帯から中西部のセラードに及ぶセルタネージョ文化、ゴムとともに発展したアマゾン地方のカボクロ文化、南部地方平原に広がった牧童のガウーショ文化の五文化圏をあげている(三田 p.107)。

[12] フランス人やオランダ人は 15 世紀のポルトガルの海図にあった仮想の島「アンティーリャ」にちなんでここを「アンティリャス諸島」と呼び、英国を中心に英語圏では「西インド諸島」と呼んでいる。

[13] この環カリブ海地域には、島嶼国が 13 カ国(スペイン語圏のキューバ、ドミニカ共和国を含む)、南米大陸北岸にガイアナ、スリナム、中米地峡にベリーズがある。その他にヨーロッパ諸国の海外領土とし

て、仏領ギアナ、マルティニク、グァドループ、サンマルタン島、米領プエルト・リコ、ヴァージン諸島、蘭領アルバ、旧アンティル諸島(2010 年解体)のキュラソー、ボネール、シントマールテン島、シントエースタティウス島、サバ島、英領のタークス・カイコス諸島、ケイマン諸島、ヴァージン諸島、モントセラト、アンギラがある。

[14] スペインが植民地政策として混血化を積極的に推奨し、また国民感情としても抵抗感がなかったことで、長く間スペイン領であったキューバ、ドミニカ共和国では、混血メスティソの比率が高い。他の島嶼国とは文化的に一味違う。この稿では両国を除く主に大・小のアンティリャス諸島を念頭に置いて書いているが、両国も多分にクレオール性という点で共通する部分を持っている。

[15] 「新大陸」の玄関口にあるエスパニョーラ島(現在のドミニカ共和国とハイチ)に住みついたならず者たちは、狩猟を生業とし、肉を塩漬けにして乾燥させて食べていたが、それを乾燥させる場所をブカンと呼ぶことから、この地域では彼らのことをブカニエ、またはバッカニアと呼んだ(ゴス p.192)。E.ウィリアムズは、豚を丸焼きにする四つ手の熊手の形をした、木製の焼串を意味する先住民の言葉であるブーカンにちなんでバッカニアと呼んだと説明している(ウィリアムズ p.96)。

[16] 1522 年アステカ帝国を征服したエルナン・コルテスが本国に送ったモクテスマ二世の財宝を、フランス人のジャン・ド・フレリの指揮する私掠船がアソーレス諸島の近くで略奪したのは象徴的な事件である(コーディングリ p.25)

[17] 私掠船とは、委任状(または通称拿捕許可状)によって敵性国商船を拿捕することを認められた武装船・乗組員のことで、彼らは平和になると食えなくなり海賊になった。

[18] スペインの「カトリック両王」は、1492 年に国内のユダヤ教徒を追放した。イスラム教徒については、カスティリャ王イサベルが 1502 年に追放し、カルロス一世が 1526 年にアラゴンからも追放した。国内に残った者は改宗者「モリスコ」になったが、キリスト教に改宗しない隠れムスリムともいえる。

[19] 「ロクロアの戦い」とは、ルイ一四世が 4 歳で即位したばかりの 1643 年 5 月、「三十年戦争」で南ネーデルラントからパリに向かったフランシスコ・ダ・メルロの率いるスペイン軍がフランス軍に大敗北した戦いである。

[20] アルフォンソ 10 世(治 1252-1284)が編集した法令集。

[21] 「先天的奴隷人」を唱えるアリストテレス以来の西洋哲学は、人間と獣がまじり合ったような生来の能力がない者は、奴隷になっても仕方がないと考えていた。スペイン人にとって、奴隷は「新大陸」で遭遇した先住民と扱いが違っていた。

[22] 白人奉公人とは、債務による年季奉公人とか、ちょっとした犯罪者、政治・宗教上の反体制派、アイルランド人の革命運動家、戦争捕虜、労働活動家、単に誘拐された者などのことである(ミンツ p.119)。

[23] 今日カリブ海地域で使われているクレオールという仏語は、一般にヨーロッパの旧植民地の国・地域で、黒人奴隷のアフリカ文化と混交することによって生まれた特有の現象、その産物、「現地もの」としての文化一般を意味している(クレオールの語源と変遷については中村隆之を参照[中村 2017])。なお類似語であるイスパノアメリカのクリオーリョ(原義が同じでブラジルで使われるクリオウロはブラジル生まれの奴隷の意)があるが、これは「植民地生まれのスペイン人」を意味する。

[24] サンテリアは、西アフリカのヨルバ語族の宗教をベースにしてキューバで生まれた新しいクレオール宗教のことで、キリスト教聖職者が用いた蔑称である(キューバのクレオール宗教については、越川芳明の『カリブ海の黒い神々』を参照)。ヴードゥー教は独特の太鼓のリズムに合わせた踊り、儀式により、数多い精霊との交流(憑依すること。すなわち聖霊が人に乗り移ること)によって病気など個人や共同体の抱

える問題を解決し、社会生活を理想的なものにする、ハイチで主に貧しい農民や都市の下層階級に信じられている民間信仰である(佐藤 p.67)。中部・西アフリカを起源とし、ハイチでキリスト教と習合し、再構築された宗教である(ヴードゥーについては、佐藤文則の『ダンシング・ヴ―ドゥー　ハイチを彩る精霊たち』を参照)。